

軍事史学

第53巻 第2号

巻頭言

日中戦争史研究の新段階

劉傑

日中戦争史は日本近代史研究のなかで、もともと蓄積の多い研究分野の一つである。一〇年前から始まった軍事、経済、社会、文化、地域政權などをテーマとした国際共同研究（慶應義塾大学出版会より公刊）は大きな成果を挙げ、日中戦争史研究を新たなレベルに押し上げた。日中戦争六〇周年と七〇周年の機会に軍事史学会が編集した『日中戦争の諸相』（一九九七年）と『日中戦争再論』（二〇〇八年）も研究の最高水準を代表する成果として注目されてきた。戦争勃発八〇年を迎えたいま、研究環境が大きく変化し、新しい研究成果が期待されている。

研究環境の変化を象徴するものの一つは、史料状況である。二〇〇三年三月蒋介石日記がスタンフォード大学のフーバー研究所で公開された。蔣日記は中国側の状況を把握する重要な史料として広く利用され、中国側からみた戦争の発生、拡大をめぐる新たな見解を多く生み出した。また、日記は中国の内政や諸外国との関係を検討する重要な材料としても注目されている。本書に掲載された論文からも読者は蒋介石日記のインパクトの一端を確認することができよう。

昨年以來、台湾の国史館は来館者の閲覧に制約を加える一方、インターネットによる史料公開を進めている。蒋介石関係史料のほか、国民政府各部の史料の一部はネット上で閲覧できるようになった。今後は豊富な史料群を所蔵している同史料館の利用条件の緩和が望まれる。

一方、アジア歴史資料センターによる史料公開は、日本のみならず、世界の日中戦争史研究の姿を一変させた。中国の研究者が日本側の史料を利用して研究するのが一般的になり、歴史事実をめぐる認識の隔たりが埋まりつつある。

この二〇年来、中国大陸における中華民国史研究が飛躍的に発展したことは、日中戦争をめぐる国際共同研究の可能性を広げた。かつては日中戦争における国民党と国民政府の役割を無視してきた中国大陸の日中戦争史研究は、今や国民政府中心の研究にシフトし、二〇一七年七月北京で開催された日中全面戦争八〇周年シンポジウムで報告された研究成果の多くは国民政府の対日抗戦をテーマとしたものであった。また、台湾の研究者が呼びかけた日本、中国大陸、台湾の研究者による共同研究の成果も期待される。九月台湾の中央研究院近代史研究所で開催された国際シンポジウムにおいて、四〇名以上の研究者が報告し、白熱した議論が繰りひろげられた。多様な史料を利用し、多様な視角を提案した日中戦争史研究の最新成果が近いうちに公表されるという。本特集号は日中戦争史研究の新段階を予感させる内容構成となっている。読者は最先端の研究を代表する諸論考を通して、日中戦争史研究の新たな可能性を実感することができよう。

（早稲田大学）